

豊臣期遠江二俣における城下町と川湊

Spatial Relations between Castles, Towns and River Ports in *Futamata* Late in the Sixteenth Century

山村亜希
Aki YAMAMURA

天竜川の谷口に立地する遠江二俣には、16世紀末の豊臣期に、二俣城と鳥羽山城という2つの機能の異なる城郭が建設された。これらは、中世から近世への移行期の特性を備えた城郭として評価されている。一方で、その膝下に存在した城下町の形態や機能、特徴については明らかにされてこなかった。本稿は、豊臣期二俣城下町の景観を、同時代史料や地誌、地籍図、近世絵図を総合的に活用して復原し、旧地形や戦国期以来の町や川湊との関係に注目しながら、そのプランを考察した。豊臣期の二俣は、複数の町場や川湊が地形・歴史条件に適った場所に立地し、川と街道がそれらを連結していたものの、全体的には分散的な集落形態であった。その一方で、町場や川湊からのヴィスタを意識した天守・石垣や、城郭と町場を結ぶ直線の大手道、その北側の方形街区、川湊と町場を結ぶ城内通路といった、二俣城の構造と連動する城下町の空間編成は、豊臣期における計画性の高さを推定させる。既存の町や川湊は、二俣城を核として有機的に結び付けられた。豊臣期二俣における城郭及び城下、周辺地域の機能分担と緩やかな連結は、中世から近世への移行期特有の城下町空間のあり方を示すものと考えられる。

キーワード：城下町、川湊、材木流送、天守

Key words : Castle Town, River Port, Timber Floating, Castle Keep

I 東海における大河川の谷口と城下町

諏訪湖に源流を發する天竜川は、赤石山脈（南アルプス）と木曾山脈（中央アルプス）の間の伊那盆地を南下し、下流で浜松平野を形成して遠州灘に注ぐ急流河川である。遠江二俣は天竜川流域において、山地から平野への地形の転換点にあたる。天竜川は、二俣の南から放射状に無数の川筋に分流し、たびたび流路を変化させ、氾濫を頻発させる暴れ川であった。東海地方には、天竜川と同様に、日本の脊梁山脈に源流を發する水量豊富な河川で、下流に広大な平野を形成する大河川が多く、木曾川、長良川、大井川などが挙げられる。

このような大河川が多い東海地方においては、二俣のような山地と平野の接点にあたる谷口は、戦国大名の支配領域の境界として戦略上の要衝であったため、戦国期から織豊期にかけて、

拠点城郭が築かれることが多い。長良川における平野と山地の接点の美濃岐阜では、先行する山城・居館と戦国城下町・井口を継承しながら、織田信長が川湊に隣接して惣構と方形街区を持つ城下町を整備した（山村 2016a）。木曾川における同様の立地の尾張犬山には、戦国期に丹羽郡の拠点城郭が築かれ、その膝下に町場や川湊が散在していたが、豊臣期には城郭の改造とともに城下町が整備され、方形街区によって区画された町場と武家地が創出された（山村 2016b）。木曾川において、犬山より上流側の山地と平野の接点となる美濃金山にも、東濃地域の拠点城郭が築かれたが、ここでも織豊期には城郭の大幅な改造が行われると同時に、先行する川湊に近接して武家地と町場が増設された（可児市教育委員会編 2013）。このように東海の大河川の谷口に位置する岐阜、犬山、金山では、織豊期に拠点城郭の大規模な改修が行われると同時に、膝下においても、先行する川湊や町場を継承・活用しながら、新たに街区や街路を創出して城下町が整備された点が共通する。これは、要衝における政治・軍事拠点としての城郭と、交易の場としての川湊と町場、寺社地から成る戦国期の谷口集落が、織豊期になって政治的・経済的に地域の中で中心性を高め、人口増加を受けて、城下町という都市空間に再編されたことを意味する。岐阜城と金山城は関ヶ原の合戦後に廃城となったが、織豊期に形成された城下町の町人地は、近世においても在郷町として存続し、川湊とともに発展した。

以上のような東海地方の谷口に位置する城郭と二俣との間には共通点が多い。天竜川の谷口に位置する二俣城も、山地と平野の接点で、戦略上の要衝として、今川氏、武田氏、徳川氏の激しい争奪戦にさらされた。そのため城主は一定せず、軍事緊張下において城主ないし城代が短期間で交代した。そのような流動性の高い歴史の中で画期となったのが、天正 18 (1590) 年における豊臣大名の堀尾吉晴の浜松城への入城である。堀尾氏は浜松城とともに、二俣城とその南の鳥羽山城を大規模に改修し、弟の宗光（氏光）を城主とした。このとき、二俣城・鳥羽山城は、本城である浜松を中心とする領国支配の一翼を担う支城として明確に位置づけられ、北遠地域の拠点城郭となった。慶長 5 (1600) 年の関ヶ原の合戦後、堀尾氏が出雲へ転封になってから、元和元 (1615) 年の一国一城令までの間に、二俣城・鳥羽山城は廃城になったが、二俣は在郷町として近世以降も発展した。

このような谷口における城郭の共通点をふまえると、他の城郭と同様に、二俣にも豊臣期に川湊を伴う城下町が形成、あるいは整備された可能性を考える必要があるのではないだろうか。ここで留意したいのが、日本屈指の森林地帯を上流に持つ東海の大河川は、大量に切り出した木材の流送ルートとして、織豊期以降から近世にかけて特に重用された点である。東海地方の谷口集落は、単に山地と平野の交易地点というだけでなく、河川が大きく分流・乱流して「暴れ川」となる手前で、上流より流送された木材を集約できる最終地点でもある。加えて、戦国期から近世初期にかけては、日本史上、稀に見る城郭・城下町の建設ラッシュ期であり、天竜川上流の山林資源の需要は極めて高かった。木材流送の一元支配を企図する領主権力が、谷口における川湊に狙いを定め、手中に入れようとするのも当然のことであろう。そうであれば、

二俣においても城郭・城下町の整備と同時に、川湊の掌握が図られた可能性が高い。

以上をふまえて、本稿では、天正 18 年以降、慶長 5 年の堀尾氏転封までの 10 年間における豊臣期二俣の景観を、城郭と町、川湊との関係に留意しながら復原し、その特徴について考察する。これまで、二俣の城下町や川湊の空間について、具体的な復原を行った研究はない。その大きな理由は、同時代史料の乏しさにある。しかし、二俣の城郭については、近年、浜松市教育委員会によって周辺地域も含めた総合調査が実施され、同時代史料のみならず、近世地誌や村絵図、地籍図、伝承等の二次史料の悉皆調査と、城跡の測量・発掘調査が進んだ（浜松市教育委員会編 2017）。この調査によって、多様な文献・絵図史料を利用することが容易になり、城郭・城下を様々な史資料を総合して検討することが可能になった。本稿では、これらの史資料を積極的に活用して、豊臣期二俣の景観復原を行う。

この課題に取り組むにあたって、他の谷口の城郭とは異なる、二俣における城郭の特性について留意したい（浜松市教育委員会編 2017）。それは、二俣における豊臣期城郭は 2 つ存在することである（図 1）。一つは、二俣町の西の蜷原台地南端に立地する二俣城であり、地域で「城山」と呼称されてきた。もう一つは、二俣町の南の独立丘陵に立地する鳥羽山城であり、二俣城との間には、寛政 3（1791）年の流路付け替え工事まで二俣川が流れていた。二俣城と鳥羽山城は、二俣川を挟んで対峙していたことになる。二俣城は永禄 3（1560）年の桶狭間の戦い頃から使用され、徳川氏と武田氏の攻防戦の主たる舞台となった。豊臣期に堀尾氏によって主要部に石垣が構築され、天守が建設された。一方、鳥羽山城も武田氏と徳川氏の攻防戦において、徳川方の本陣として使用された後、堀尾氏によって中心部の石垣構築と庭園の建設がなされた。このように 2 城は戦国城郭からの改修という点では共通するが、豊臣期に、二俣城が山城としての軍事機能を高めるのに対し、鳥羽山城は居館としての居住・政治性を強化する。そのため、これら 2 城は、両城で機能を分担する「一城別郭」の城と評価されている。このように、豊臣期二俣には二俣城と鳥羽山城の 2 城が別個に存在しながらも、両者は機能を分担して有機的に関連しており、城下町や川湊を考える際にも、これらの城郭との関連を視野に入れる必要がある。

なお、これら 2 城とは別に、二俣城から北に約 1.5km 離れた位置に、戦国城郭の笹岡城がある。笹岡城は、二俣城以前の地域支配の拠点であり、永禄 3 年の桶狭間の合戦頃まで今川氏家臣によって使用された。しかし笹岡城は、二俣城や鳥羽山城とは異なり、豊臣期に改修された形跡はない。

II 二俣の地形環境

図1の明治23(1890)年の地形図にみるように、二俣は周囲を山地・丘陵で囲まれた狭い盆地に位置する。盆地は、西側を二俣城の立地する蜷原台地に、南側を鳥羽山城の立地する鳥羽山に囲まれる。盆地内の二俣からすると、天竜川はこれらの台地・山塊の裏手をめぐって流れる。そのため、二俣は天竜川の谷口集落ではあるが、集落そのものが天竜川に面する訳ではない。二俣の中で、最も西側の川口のみが、天竜川に面する。

川口と鳥羽山南麓の北鹿島、その対岸の西鹿島、佐野崎、瀬崎は、近世に鹿島五カ村と呼ばれ、天竜川の木材筏流しや舟運に携わる村々であった。これらの村から成る広義の鹿島は、天竜川の谷口を扼する兩岸に分布していた。戦国期における天竜川の本川河道は、北鹿島から南下し、西鹿島の東を通過して、浜松城近くの馬込川に至る流路であり、明治期の河道とは異なり、浜松平野の西側を流れていた。二俣城・鳥羽山城とその本城である浜松城は、二俣(秋葉)街道と、天竜川(馬込川)舟運で結ばれていたことになる。文明18(1485)年に万里集九が、後に浜松城下となる引間市に滞在したとき、供の石河が遠江の名産として「二俣栗」を持ってきたりすることからも、戦国期における旧天竜川(馬込川)舟運の存在が示唆される。

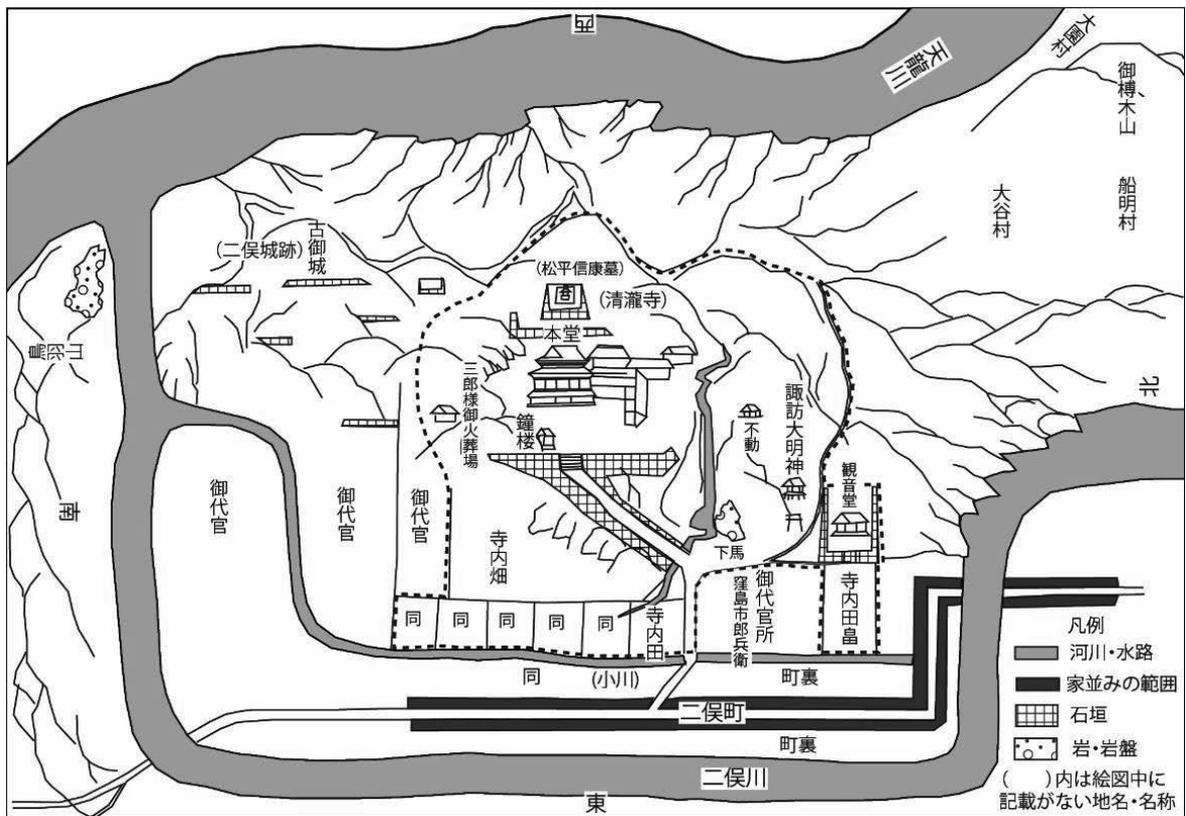


図2 「清瀧寺領絵図」トレース図

注) 絵図には二俣町は家型の連続として描かれるが、その範囲のみ記した。山林の樹木・草地は省いた。

資料：元禄15(1702)年～正徳2(1712)年「清瀧寺領絵図」

二俣の小盆地の中を貫通する河川が、二俣川である。明治の地形図にみる二俣川は、鳥羽山を掘り割って天竜川に注ぐが、これは近世に付け替えられた河道である。二俣川の流路変更工事は、明和3(1766)年に着手され、寛政3(1791)年に完成した。それ以前の二俣川は、二俣町の南で屈曲して西流し、二俣城と鳥羽山城の間の川口で天竜川と合流していた。付け替え以前の旧河道は、元禄15(1702)年から正徳2(1712)年の間の景観を描く「清瀧寺領絵図」(図2)²⁾や、宝暦3(1753)年の「二俣・山東村絵図」(図3)³⁾に描かれている。

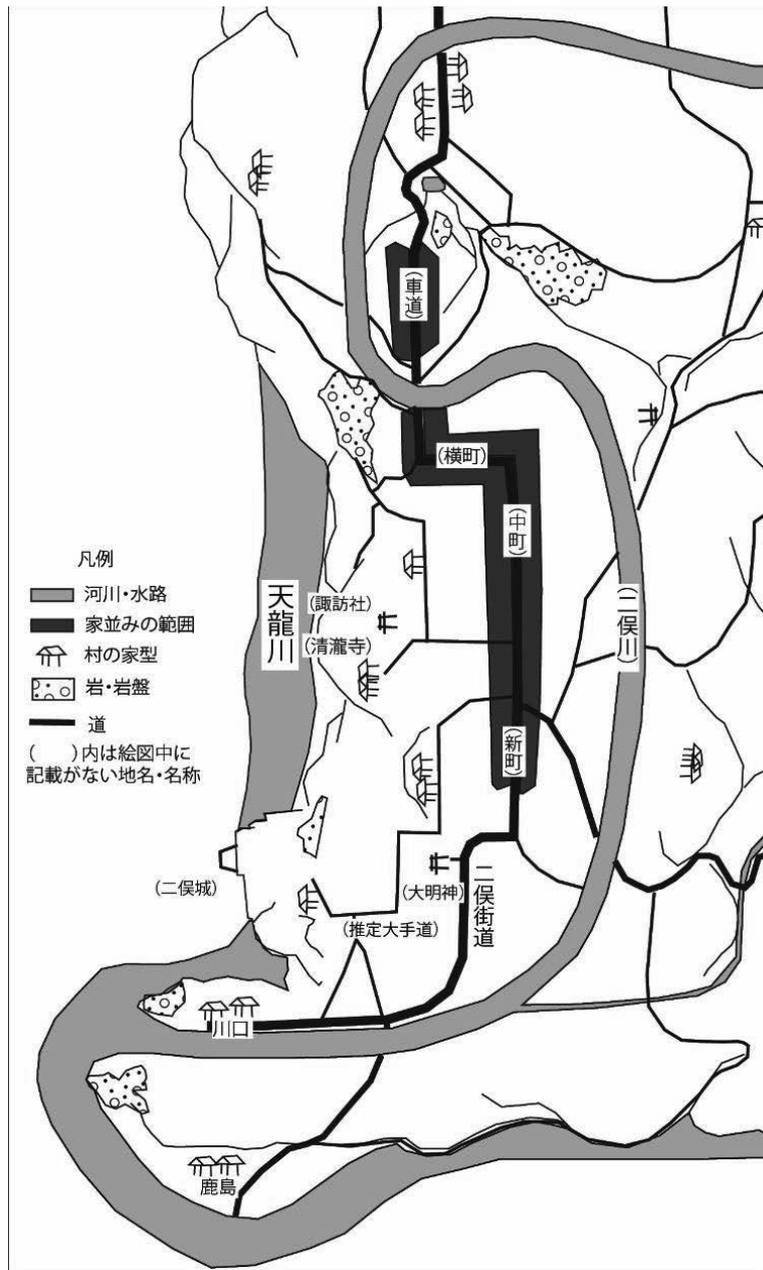


図3 「二俣・山東村絵図」南部トレース図

注) 絵図には二俣町は家型の連続として描かれるが、その範囲のみ記した。山林の樹木・草地は省いた。

資料: 宝暦3(1753)年「二俣・山東村絵図」

豊臣期遠江二俣における城下町と川湊（山村亜希）

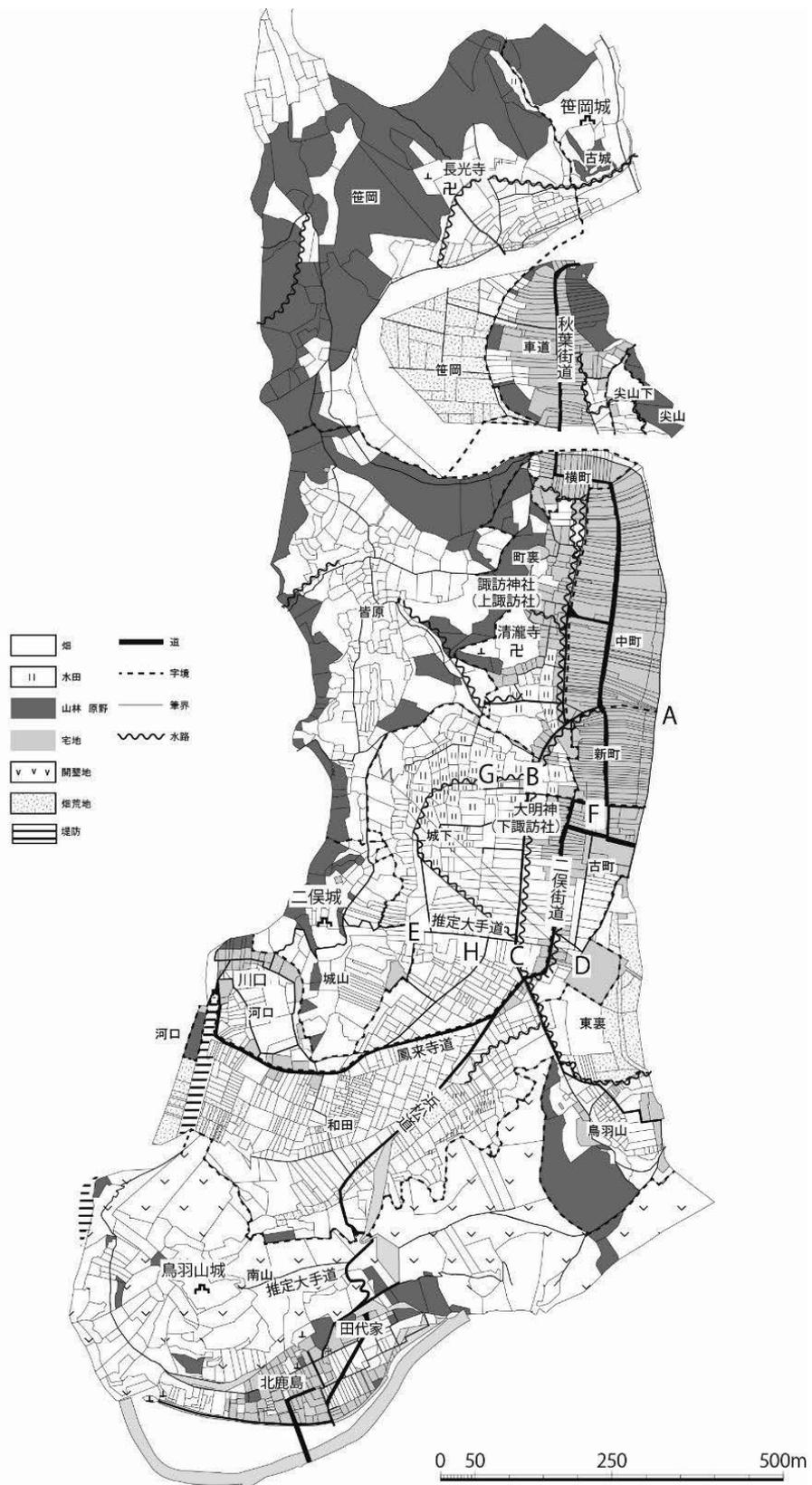


図4 二俣地籍図トレース図

資料：大正2（1913）年11月「二俣区全図」

ここで、旧二俣川の川幅や周辺の微地形を、大正2(1913)年の「二俣区全図」⁴⁾(図4。以後、地籍図と呼ぶ。地籍図の小字名には「」を付ける)において、検討したい。地籍図(図4)からは、近代の土地利用だけでなく、旧地形や土地に刻まれた歴史をも読み取ることができる。二俣村は全体として畑が卓越するが、旧河道に相当する「東裏」や「和田」には、帯状の畑荒地と水田のまとまりがある。二俣川の付け替えから一世紀以上経過しても、まだなお、旧河道は周囲よりも低い低湿地で、完全には畑地にできなかったのだろう。旧河道の河口にあたる「河口」や、上流で二俣川が大きく湾曲する「笹岡」にも、同様に畑荒地が広がり、そこが低湿地ないし河原であったことを示す。ここから、付け替え以前の二俣川旧河道の河原も含めた川幅は広く、特に屈曲点はかなりの川幅であったことが推定される。

「清瀧寺領絵図」(図2)には、付け替え前の二俣川とは別に、清瀧寺門前を南下する小川が描かれる。この小川は、地籍図(図4)における「中町」と「町裏」の字界の水路であろう。位置からみて、二俣川の旧河道ないし分流であったと推定される。近世二俣町の中心である「中町」は、二俣川とこの水路に挟まれており、自然堤防の微高地であることが推定される。

ここで、地籍図(図4)の水路と水田の分布に注目しよう。二俣の耕地は、全体として畑が大半を占めるため、水田がまとまって分布する場所は珍しい。水田のまとまりは、「城下」に広く分布し、ここが二俣の中でも低湿地であることが分かる。ここで、「中町」と「新町」の字界(図4・A—B)が、特異な半円状のカーブをなし、その周囲の短冊形地割だけ歪みも大きい点に注目したい。このカーブに「中町」西裏の水路が合流する(B—C)。これは、「中町」西裏の水路とは別の二俣川の旧河道の痕跡ではないだろうか。「中町」と「新町」の字界付近は、かつて府良町と呼ばれ、どちらの町ともつかない「ぶら町」だと言われていた(沖 1978)ことから、集落形成が「中町」及び「新町」よりも遅かったと考えられることも、字界カーブが旧河道であったことを示唆する。これらの旧河道が自然堤防裏の後背湿地に集まり、滞水しやすい「城下」付近は低地になったのだろう⁵⁾。このように、二俣街道と蜷原台地の間には、「城下」を中心として、低湿地が広く存在していた。

Ⅲ 二俣における城下町と川湊の景観

1 「古町」の川湊と街道

本章では、前章における旧河道と低湿地の推定をふまえて、豊臣期二俣城下町の景観を復原する(図5)。街路・街道は、明治期地形図(図1)に加えて、近世絵図の中で最も実態に即した描写が特徴の「二俣・山東村絵図」(図3)を基本とし、後述のように、大正期の地籍図(図4)から推定される街路を追記した。この上に、街区、城、寺社、町場、川湊の立地と形態を比定し、これらの景観構成要素相互の関係について、考察を進める。

まずは、蜷原台地南端に立地する二俣城の周辺に、城下町に相当する空間があったのかどうかについて検討しよう。堀尾氏が転封となった直後の慶長6(1601)年から同14(1609)年

の間に作成された「松平忠頼領郷村帳」⁶⁾の中に、「二俣村城下」という地名がみえる。地籍図（図4）には、二俣城の東に「城下」という小字があり、この付近がかつての二俣城下に相当するだろうことは容易に想像がつく。また、寛政11（1799）年に地元の国学者・内山真龍が執筆した『遠江国風土記伝』⁷⁾（以下、『風土記伝』と呼ぶ）所収の「二俣城跡」図（図6）は、要所を石垣で固めた二俣城の東に、「元和以前号二俣御城下村」との注記とともに「古町」を記載する。「城下」の東に位置する字「古町」も、二俣城下に含まれていたことが分かる。

地籍図（図4）において「古町」と「城下」との字界で、街道筋に沿った場所に大明神が立地する。この神社は、近世二俣町の氏神である「中町」西側の諏訪神社の旧地と伝わり、神輿渡御の御旅所である。「中町」西側の諏訪神社は上諏訪社、「城下」の大明神は下諏訪社と呼ばれた。宝暦9（1759）年の諏訪大明神棟札⁸⁾によると、田中にあった下の諏訪社が、たびたび水難を受けて荒れていたため、氏子の総意により上の諏訪社に遷宮をしたとする。ここから、大明神の立地する諏訪社旧地（下諏訪社）が水害に遭いやすい低湿地にあること、土地条件の悪さにも関わらず、かつてここに二俣の氏神が立地したことが知られる。

それでは、なぜここに、諏訪社が創建されたのだろうか。大明神の由来によると、信濃の諏訪神社から御神威を広めるために天竜川に流したお札と小祠が、天竜川の増水時に川口から二俣川に逆流した水に乗って流れ着いたことをきっかけとする（沖1978）。この場所は、前章で推定した清瀧寺門前を南下する小川に接する。ここに天竜川から付け替え前の二俣川を遡上した水が、さらに小川を遡って到達することは、十分にあり得る。

ここで、「古町」の東側と南側を流れていた旧二俣川に注目したい。『風土記伝』の「二俣城跡」図（図6）は、付け替え前の二俣川が、大きく屈曲する地点を油渕とする。川の屈曲点は水が溜まりやすく、川幅も広くなる。『風土記伝』によると、油渕にはかつて住人を困らせる大蛇がいたとするが、これはこの屈曲点付近で洪水が多発していたことを示唆するエピソードだろう。そもそも二俣川の付け替え自体が、天竜川の増水の影響を受けて二俣川に逆流した水が、二俣の小盆地で浸水被害を引き起こすことを問題として実施された事業であった。二俣川付け替え後の地籍図（図4）においても、油渕に相当する「東裏」には大型の畑・荒地が多く、粗放的な土地利用であったことがうかがえる。

地籍図の「東裏」に向かって「古町」の字界が張り出す場所に、大型の方形の宅地（図4・D）がある。明治23年の地形図（図1）にもこの施設は存在しており、そこに天竜川から蜷原台地を貫いて導水し、二俣川に排水していたことが分かる。現在はこの大型区画に電力会社の施設があることから推定すると、近代初期における水力発電関連施設と思われる。この場所が旧二俣川の屈曲点で低湿地であり、付け替え後の二俣川にも排水しやすいことが、水力発電施設の立地に好都合であったのだろう。これらのことから、「古町」は、旧二俣川の屈曲点で、天竜川からの水流も逆流しやすい、広い淵に隣接していたと言えよう。

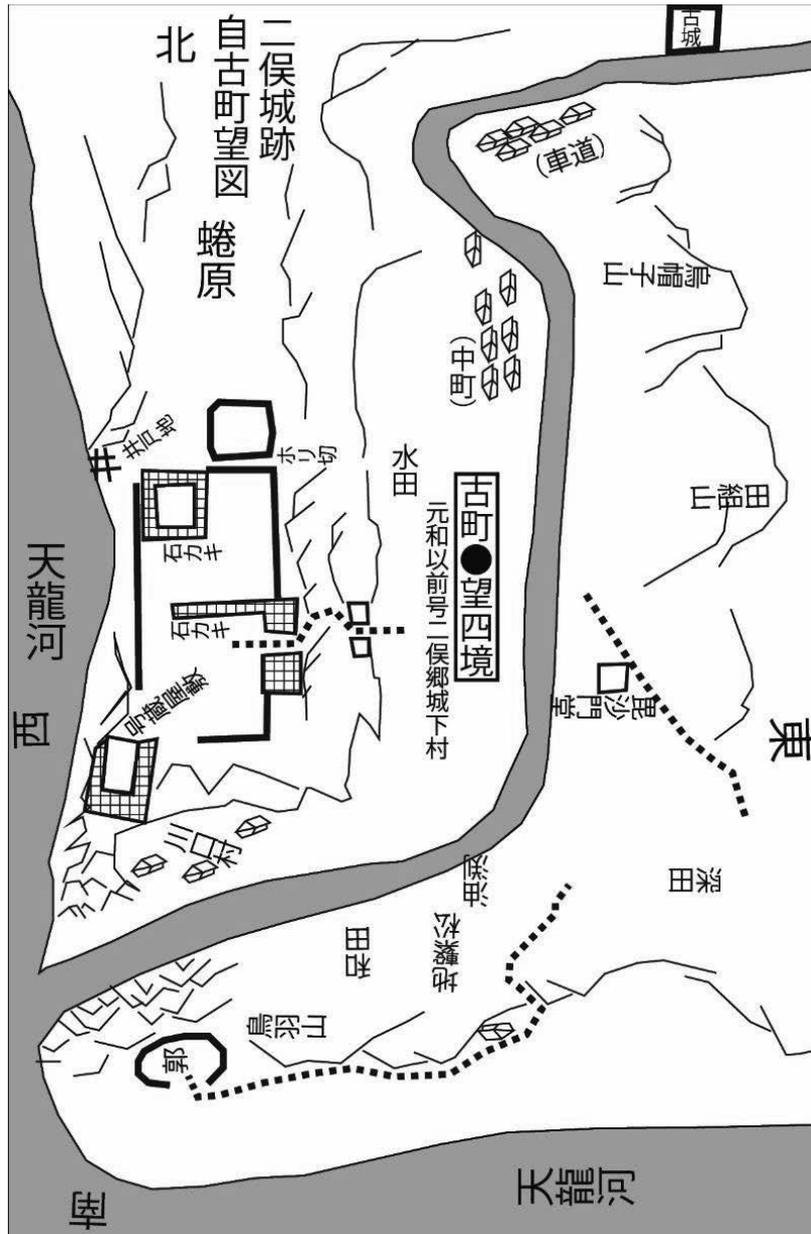


図6 『遠江国風土記伝』「二俣城跡」トレース図

注) 山林の樹木・草地は省いた。

資料：寛政11（1799）年『遠江国風土記伝』

二俣の氏神である諏訪大明神が川と関連する創建伝承を持つことは、旧社の立地する「城下」・「古町」まで天龍川から二俣川への船の遡上が可能であり、付近に川湊があった歴史を示唆する。「古町」という地名から考えて、近世二俣の町場の中心にあたる「中町」や「新町」に比べて成立が古い二俣町の原集落が「古町」に存在し、そこには川湊があったことが推定される。

それでは、「古町」は川湊としての機能しか想定できないのだろうか。「古町」を通る二俣街

道は、南下すると、「古町」の南西で二つに分岐し、川口で天竜川を渡って奥三河に向かう鳳来寺道と、鳥羽山の峠を越えて天竜川を渡る浜松道になる。この分岐点周辺の街路は、現代の区画整理によって大きく変更されたが、今でもその分岐点には、表に「右秋は五り 光明二り」、裏に「左濱まつ 右鳳来寺」と刻まれた石碑が立つ。戦国期の二俣城をめぐる武田氏と徳川氏の攻防は、三河から遠江にかけての平野と山地の接点で多発し、そのような地点を結ぶ東西の交通路は頻繁に利用されていた（本多 2010）。二俣から鳳来寺に抜ける東西道も、戦国期より存在していたことが推定される。堀尾期には、本城の浜松城と支城の二俣城との連絡が重要になったであろうことから、浜松道も頻繁に利用されていたであろう。また、明治の地形図（図 1）によると、「古町」からは遠江国府の見付への街道も二俣街道から分岐し、二俣川を渡河して天竜川の左岸を南下していたことが分かる。このように「古町」は、北は秋葉、西は鳳来寺、南は浜松、東は見付に向かう街道の交点であった。

永禄 11（1568）年に今川氏真は、北遠の犬居郷に運ぶ兵糧の森口・二俣口での通行を許可している⁹ことから、二俣に関が設置されたことが分かる。今川氏が、北遠に向かう兵糧の運搬を森と二俣で監視しているのは、森と二俣がいずれも遠江における平野部と山間部の接点にあたり、街道の集約点であったことによるのだろう。このときの「二俣口」は、関所の役割から考えて、平野部から北上する街道の集約点である「古町」付近に比定するのが妥当であろう。

以上の考察から、「古町」は水陸の交通の結節点であったことが分かる。笹岡城から二俣城への移転は、軍事緊張が高まる中で、天竜川の絶壁を背にし、防御に適した戦略拠点を選んだというのが主要因であろう。しかし、陸上交通の要衝で川湊を持つ「古町」に接近することも、地域支配の拠点としての城郭移転の理由の一つであるかも知れない。

2 大手道と方形街区

二俣城の石垣構築や天守建設などの整備が進められた豊臣期に、「古町」はその城下町として、いかなる形態であったのだろうか。『風土記伝』所収の「二俣城跡」図（図 6）は、図題に「自古町望図」との添え書きがあり、「古町」から二俣城を眺めた視点で描かれる。しかし、18 世紀後期の作成当時、二俣町の中心は「中町」であり、同図にも「古町」に集落は描かれない。それにも関わらず、二俣城は「古町」から眺めた構図で描かれ、「元和以前号二俣御城下村」と注記された「古町」からは、点線で二俣城の大手口に入る道も描かれる。これらのことから、元和年間よりも前には、「古町」が二俣城下であって、大手道も「古町」に向かっていたとする認識があったことが分かる。これは、18 世紀前期の二俣村の田畠屋敷名寄帳¹⁰の中にある「城下大手口」という地名からも明らかだろう。

現在の「城下」は区画整理がなされたために、大手道に相当する道は残っていない。しかし、明治期の地形図（図 1）や大正期の地籍図（図 4）には、二俣城から「古町」に向かう直線道が描かれる。地籍図によると、この直線道（図 4・E—C）は「古町」の二俣街道まで達し、さら

に筆界線となって、先述の電力会社の大型区画（D）に至る。先に述べたように、この付近に二俣川の川湊が推定されることをふまえると、大手道の終点は二俣街道ではなく、川湊であったのではないだろうか。

「古町」から大手道を二俣城に向かって進むと、その先が登城路になる。この登城路の延長上の緩斜面には、かつて石垣が存在しており（大場ほか 1970）、現在も土中に埋没している可能性が高い。これは、大手道から「見せる」ために効果的に構築された石垣ではないだろうか。大手道の延長上には、堀尾期に築造された天守台がある。二俣城の天守台は本丸の最も奥まった場所にあり、山城の直下からは見えにくい、街道沿いで川湊のある「古町」まで離れると視認できただろう。大手道が直線であるのは、「古町」やその川湊から二俣城大手の石垣、その先の天守までのヴィスタを意識したものと推定される。

豊臣政権の城下町では、しばしば城下から城郭へのヴィスタが重視され、城と城下町を結ぶ景観演出がなされたことが指摘されている（宮本 2005）。その際、城下町の基軸となる街路から天守を見通すヴィスタが設定され、町の安全と秩序を一元的に保障する豊臣政権の所在を視覚的に表明する手段となった。豊臣大名である堀尾吉晴によって天守が建造され、城郭・城下町が大きく改造された本城の浜松城においても、天守を見通すように大手道が設定された（浜松市教育委員会編 2011）。これと同様に、二俣城においても「古町」から天守を見通す大手道が設定された可能性は高い。

ここで改めて、地籍図における推定大手道（図 4・E—H—C—D）以北の地割パターンに注目したい。「古町」を通過する二俣街道 Ⅲに平行して、その東側に 1 本、西側に 2 本の南北直線ライン（図 4・F—D, B—C, G—H）が見える。つまり、「古町」から「城下」にかけて、全部で 4 本の南北の直線ラインがある。この 4 本の直線の間には、短冊形地割が広がっている。近世二俣町の町屋地区でもないのに、このように直線の整然とした地割群が残っていること、ここが二俣城の城下で推定大手道の沿線であることをふまえると、これら 4 本の直線で囲まれる範囲が城下町の街区であったと想定できないだろうか。短冊形地割からは、町人地であったことが推定される。一方、二俣城と方形街区の間の地割は整っておらず、大型の区画も不明瞭ながら散見される。大手口に近い山麓には、家臣屋敷があったのかもしれない。しかし、「古町」はともかく「城下」は、先に推定した通り低湿地であり、武家地としても町人地としても、決して居住に向けた立地とは言えない。

街路や集落分布を実態に即して描く、宝暦 3（1753）年の「二俣・山東村絵図」（図 3）においても、二俣町の中心は「中町」にあり、「古町」の北側にかろうじて家並みが延びるものの、その南側や「城下」には家並みがほとんど見られない。城郭廃城後に「古町」や「城下」の市街地が残らなかったのは、その住人が豊臣期の二俣城と密接な関連を持っており、廃城とともに人口が流出したことが考えられる。また、近世の庄屋の歴史を記した記録によると、城に近い場所は土地が低く、この辺りの在家が毎度のように水害に遭うので、これより少し地面が高

く、水難の憂いのない、少し上の字「大村」へ引っ越したとされる(坪井 2017)。地籍図に「大村」という字は見えないが、横町から中町、新町と続く近世二俣町の集落部を指すと見るのが妥当であろう。近世二俣町のうち、最も南で「古町」と接する字が「新町」である。「新町」という名称からは、隣の「中町」や「古町」に比べて成立が新しいことが示唆される。地籍図でも「新町」の短冊型地割は、隣接する中町や「古町」に比べて、間口が狭く、地筆が混みあっており、その形状が成立の新しさを物語っている。「城下」と「古町」の住人の中には、地形的に決して好条件とは言えず、城郭という核を失うと利点もない土地から退いて、新町に移住したと者も少なくなかったと推定される。

このように、二俣の小盆地の狭い範囲内で、豊臣期の城郭と一体化した城下町から、近世の街道沿いの在郷町へと集落再編が生じたと考えられる。それでは、近世二俣町の中心である「中町」も、新町と同様に「城下」・「古町」からの住人移動によって形成された新しい町だろうか。

「中町」の歴史を考える上で鍵となるのは、蜷原台地の麓に立地する清瀧寺である。清瀧寺は、二俣街道沿いの中町に向かって東に参道を伸ばしており、「中町」は清瀧寺の門前にあたる。清瀧寺の前身は、応永 12 (1405) 年に滝のあたりに結ばれた草庵を起源とする長安院である。この寺が「清瀧寺領絵図」(図 2) に見るような広大な境内の画期となったのは、天正 7 (1579) 年に二俣城で自刃した徳川家康の嫡子信康の菩提寺とされてからである。その時の二俣城主である大久保忠世の墓も清瀧寺にある。徳川期の清瀧寺は、二俣城と関連の深い施設であった。

「清瀧寺領絵図」(図 2) によると、清瀧寺門前の参道のすぐ北脇に、「御代官所 窪島市郎兵衛」と書かれた方形の大型区画があった。「御代官所」とは、元禄 15 (1702) 年から正徳 2 (1712) 年まで幕府の中泉代官を務めた窪島氏の時期に、中泉代官に関する役所であったことを示す。宝永 4 (1707) 年に二俣川から川下げされる民間の炭・薪・串柿を改め、分一税を徴収する二俣改所が置かれるが、ほぼ同時期のこの絵図に描かれる「御代官所」は、この改所に相当する可能性が高い。このように、清瀧寺門前に寺領外の方形状区画が存在し、公的施設として利用されたのは、かつてこの場所に同様の機能の施設が存在し、敷地が既に存在したためではないだろうか。また、同絵図では、御代官所前の水路を渡るとき、参道が屈曲して「中町」の二俣街道に接続する。食い違い虎口に似たこの人為的な形状は、地籍図(図 4)でも確認できる。二俣が近世の在郷町となって以降、街路・地割形態に大きな変化が生じる契機を特に想定できないことから、寺院門前の方形状区画も参道の屈曲も、戦国期二俣城期から存在したのではないだろうか。清瀧寺と徳川期の二俣城との関連の深さをふまえると、ここに戦国期二俣城に関連した山麓居館のような施設を推測することも許されるだろう。

二俣川流送の物資を改める近世の二俣改所の立地から考えて、二俣川の船着場ないし河岸が「中町」にあったことがうかがえる。戦国期の「中町」にも、川湊があった可能性がある¹²⁾。清瀧寺や「中町」は、二俣城から北に 500mほど離れ、「古町」・「城下」とは市街としては不連続であるものの、二俣城と清瀧寺との関わりの深さから考えて、戦国期二俣城下町の一部であ

り、豊臣期にもその形態は受け継がれたと考える。

3 天竜川の材木流送と城郭

再び二俣城の天守へのヴィスタを考えたい。先述のように二俣城の天守は、本丸の中でも大手口側から最も奥まった場所にある。ここに天守の高層建造物が立っても、城に接近するほど、かえって天守が見えにくくなる。この天守を見通すことのできる最適な場所は、少し離れた「古町」以外にも、天竜川の河上や二俣川の河口、二俣川を挟んだ対岸の鳥羽山城、「古町」の川湊が挙げられる。二俣城の天守への見通しの良い場所は、堀尾氏が併用した鳥羽山城を除き、いずれも天竜川や二俣川といった河川に関連する場所である。ここから、天竜川や二俣川を往来する船に「見せる」ように、二俣城の天守が設定された可能性がある。

二俣城の直下で旧二俣川と天竜川の合流点に、川口という小集落がある。近世の川口は、天竜川南岸の西鹿島、鳥羽山城南麓の北鹿島とともに、材木流送に関わる特権を与えられていた。豊臣期以前の天正 8（1580）年には、徳川家康によって「加嶋一類」の孫尉・弥太夫に、先規の通り諸役を免除し、奥山からの材木下げの際は兵糧を出すことが命じられ、天竜川の材木筏流しが安堵されている¹³⁾。「加嶋一類」を近世の鹿島五ヶ村とすれば、その中に川口も含まれ、戦国期から特権が付与されていたと考えられる。堀尾氏転封直後の「松平忠頼領郷村帳」¹⁴⁾にも、「川口船越」や「北鹿島船越」の高が挙げられており、船頭が存在が分かる。川口と北鹿島は、堀尾期以降も天竜川の材木流送における主要な川湊であり続けた。

川口は、鳳来寺道が天竜川を渡る渡河点でもあったことから、水陸の結節点としても重要であった。このように材木流送の拠点で水陸の交通の要衝である川口に対して、隣接する二俣城主となった堀尾氏が無関心であったとは考えにくい。地籍図（図 4）には、大手道から登城し城内に入った道が、城内を縦断して川口に至るルートが描かれる。この城内道が川口に向かって降りる曲輪（西の丸 I）には、川口から見上げた南斜面に、残存高で 5.6m もの城内最大規模の高石垣が構築されていたことが、近年の発掘調査で確認された（浜松市教育委員会編 2017）。二俣城は川口や天竜川・二俣川の川船からの視線も、大手口と同様に強く意識して石垣を構築していたことが分かる。この高石垣を持つ、川口集落の直上の曲輪（西の丸 I）は、『風土記伝』「二俣城跡」図（図 6）では「蔵屋敷」として描かれる。川口から荷揚げした物資を保管・管理する蔵が、城内に存在したことが推定される。

舟運と街道の結節点としては、鳥羽山城南の北鹿島も重要であった。北鹿島には、徳川家康により天竜川筏流しの特権を得て、近世には材木筏問屋となった田代家がある。元和 3（1617）年に北鹿島対岸の椎ヶ脇神社の境内に、北遠諸村から川下げされる民間の材木・炭・薪等を集めて分一税を徴収する鹿島十分一番所が設置された。田代家はその役人や請負人を務める有力者であった。田代家は川口村を含めた鹿島五ヶ村の草分けとされることから、北鹿島は天竜川の谷口集落の材木流送において、中心的な地位にあったと考えられる。田代家は、鳥羽山城の

直下に位置し、二俣から浜松に向かう街道の峠道が北鹿島側に下りた地点にある。この街道が鳥羽山の尾根を越える地点から鳥羽山城に向かう大手道が分岐していた。つまり、鳥羽山城の大手道は、街道を介して北鹿島と連結しており、鳥羽山城の城郭構造と北鹿島の有力家の立地は関連していたことが分かる。

このように、川口は二俣城と、北鹿島は鳥羽山城と直結する川湊であり、それぞれの城郭構造とも連動していた。豊臣期の堀尾氏は、川口や北鹿島を介して、天竜川の水運と渡河点の管理・支配を企図したのではないだろうか。

IV 豊臣期二俣城下町の空間構造

豊臣期二俣城下町の空間構造について、図5の復原図に基づいて考察を進めたい。豊臣期の二俣においては、「城下」・「古町」、「中町」、川口、北鹿島といった複数の川湊や町が、それぞれの地形・歴史条件に適った場所に立地し、全体として分散的な集落形態に見える。それらを連結していたのが街道と河川であった。このような城下町の集落形態は、豊臣期二俣城の改修とともに新規に建設されたものではなく、それ以前の戦国期の空間構造を継承したものであろう。豊臣期二俣には、近世城下町に一般的にみられる「面」として広がる市街地の連続を想定し難い。全体として中世的な都市構造（山村 2009）であったと評価できよう。

一方で、豊臣期における、「古町」や川湊からのヴィスタを意識した天守・石垣や、城郭と「古町」を結ぶ直線の手道、大手道北側の方形街区、川口と「古町」を結ぶ城内通路は、地形や既存の歴史構造とは関連しない、人為的・計画的な構造物である。堀尾氏は、大改修を施した城郭の縄張りや連動させながら、戦国期以来の町や川湊を、二俣城を核として有機的に結びつけたと推定される。

このような豊臣期二俣城下町の形成プロセスを、同時期の堀尾吉晴による本城の浜松城下町の整備と比較してみよう。豊臣期浜松城下町には、二つの町場が推定されている（浜松市教育委員会編 2011）。一つは、東海道と天竜川（馬込川）の交点に発達した引間宿であり、中世以来の古い宿町で、馬込川の渡河点でもあった。もう一つは、その前の徳川期（1570年～1590年）に拡張した浜松城南側の東海道に沿った町場であり、そこには計画的な商工業者屋敷地が推定されている。豊臣期浜松城の天守に向かう大手道は、これら2つの町場のうち、古い方の町場である引間宿からの見通しを意識して設定された。その一方で、浜松城下町の空間構造に大きな変更はなく、既存の集落形態を継承したに過ぎない。その結果として、不連続な市街が東海道によって結ばれる形態となった。

このような浜松城下町の空間構造は、引間宿を「古町」、浜松城南側の町場を「中町」と読み替えば、豊臣期二俣城下町と似ている。城郭から大手道が延びる方向が、古くからの川と結びつく町場である点も共通する。さらに、近世に引間宿が町ではなく武家地に変わり、町場が一元化された点も、近世二俣における「古町」の衰退と新町への移動、「中町」の発展に似てい

る。浜松と二俣という豊臣期城下町は、「面」として連続した市街を創出する近世城下町の都市建設と比べると、限定的な都市空間であった。しかし、川湊や町からの見通しを意識させる装置を城郭・城下町双方に設定して城と町を一体化し、二俣城を「見せる」城として改修したことは、人間の視覚に訴えかける、効果的な権威の表現方法であった。この点に、戦国期とは異なる豊臣期の画期性を指摘したい。

その点では、二俣城とともに堀尾期に改修され、併用された鳥羽山城の存在が注目される。二俣城が地域で城山と称され、近世の「清瀧寺領絵図」（図2）や「二俣・山東村絵図」（図3）でも明確に古城と認識されていたのに対し、鳥羽山城は城郭とは認識されてこなかった。これは、鳥羽山城には、左右に石垣を伴う幅の広い直線大手道や枯山水の庭園が存在する一方で、天守を持たない（浜松市教育委員会編 2017）ことが理由であろう。その一方で、鳥羽山城から天竜川下流の浜松平野への眺望は非常に良く、二俣城からはこれほどの眺望を期待できない。二俣城が城郭らしい軍事機能を発達させるのに対し、鳥羽山城は御殿のような迎賓館的機能に特化している。鳥羽山城は外部から「見せる」城であるというよりは、そこから支配領域を「見る」城であったことが推定される。鳥羽山城からの雄大な領国の風景は、見る人の視覚に訴えかける迫力があり、これも一種の権威の表象であろう。豊臣大名である堀尾氏は、「見せる」城と「見る」城として、2城を改修したと考えられる。

二俣城からは浜松平野の眺望が得られず、鳥羽山城には城下町らしき集落は付随しない。鳥羽山城には迎賓機能と眺望の確保、二俣城には経済・軍事機能と城下町経営という、地理的特性に応じた機能を2城に分担させ、それらを統合して北遠支配の拠点としたのだろう。このような豊臣期二俣における城郭及び周辺地域の機能分担と緩やかな連結は、豊臣期という中世から近世への移行期特有の城下町空間のあり方を示すと考えられる。

（京都大学大学院人間・環境学研究科）

【謝辞】 本稿は、浜松市教育委員会による二俣城跡・鳥羽山城跡総合調査に参画し、調査を行った成果をまとめた「二俣城下町の空間構造」（浜松市教育委員会編 2017）を、全面的に改訂したものである。地籍図・古地図の閲覧やトレース図作成、現地踏査に際しては、浜松市教育委員会の協力を得た。浜松市教育委員会の鈴木一有氏、和田達也氏、鈴木京太郎氏、井口智博氏と、内山真龍資料館の坪井俊三氏には、資料閲覧や現地踏査の便宜を図っていただき、多くのご教示を頂いた。ここに記して御礼申し上げる。

【注】

- 1) 『梅花無尽蔵』文明17年9月15日。Web版続群書類従 第12輯下文筆部、818頁。
- 2) 米山家文書。浜松市教育委員会編（2017）巻頭図版15-2に写真が掲載されている。
- 3) 宮沢家文書。二俣村と山東村の山論に際して作成された絵図である。浜松市教育委員会編（2017）巻頭図版14-1に写真が掲載されている。

- 4) 浜松市教育委員会蔵。本図の表書に、「大正2年11月裏打 二俣町ノ内二俣区全図」とある。管見の限り、二俣における最古の地籍図である。浜松市教育委員会で地籍図を集成・合成し、トレースした図（浜松市教育委員会編 2017, 146-148頁）を利用した。
- 5) この低地を望む山麓には、明治40年2月に竣工した二俣小学校の校舎があった。年不詳であるが、竣工時からそれほど時間が経っていない時期に、この小学校校舎を南から撮影した古写真（二俣町の天竜ふるさとガイドの会の瀧氏より頂戴した）には、その南には池のような深田ないし蓮田が広がっていた。
- 6) 浜松市教育委員会編（2017）「附編 関連史料積文」史料63。
- 7) 『遠江国風土記伝』国立国会図書館デジタルコレクション。「二俣城跡」図は、浜松市教育委員会編（2017）巻頭図版13に写真が掲載されている。
- 8) 宝暦9年1月5日「諏訪大明神棟札」清瀧寺文書26（天竜市役所編 1981b）。
- 9) 永禄11年9月21日「今川家朱印状」奥山文書。浜松市教育委員会編（2017）「附編 関連史料積文」史料19。
- 10) 享保13（1728）年10月「田畠屋舗名寄帳」大隈家文書。浜松市教育委員会編（2017）「附編 関連史料積文」史料65。
- 11) 地籍図（図4）によると、近世二俣街道が「城下」と「古町」の字界となっており、沿道には短冊型地割が連なるものの、街道を軸とする両側町の形態をとらない。豊臣期にはこの道が街道筋ではなく、その一本東の「古町」の筋が街道であった可能性もある。地籍図にも、南北に不自然に細長い敷地が「古町」の中央部に見える。これが豊臣期の二俣街道の痕跡である可能性を指摘したい。
- 12) 戦国期と近世における「中町」の船着場・川湊の具体的な場所については定かでない。参道の延長上で「中町」の町裏か、街道が屈曲する「横町」の町裏であろうか。
- 13) 天正8年2月4日「徳川家康朱印状」田代家文書1（天竜市役所編 1981b）。
- 14) 前掲注6）。

【文献】

- 大場亀吉・片田直太・野沢正司 1970. 『二俣城』天竜市地方史研究会.
- 沖次郎編著 1978. 『郷土シリーズ1 二俣のまつりと若連』天竜市地方史研究会.
- 可児市教育委員会編 2013. 『金山城跡発掘調査報告書』.
- 天竜市役所編 1981a. 『天竜市史 上巻』.
- 天竜市役所編 1981b. 『天竜市史 史料編3』.
- 浜松市教育委員会編 2011. 『浜松城と城下をめぐる』.
- 浜松市教育委員会編 2017. 『二俣城跡・鳥羽山城跡総合調査報告書』
- 坪井俊三 2017. 二俣城関連史料. 浜松市教育委員会編 『二俣城跡・鳥羽山城跡総合調査報告書』, 159-178.
- 本多隆成 2010. 『定本 徳川家康』吉川弘文館.
- 宮本雅明 2005. 『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版.
- 山村垂希 2009. 『中世都市の空間構造』吉川弘文館.
- 山村垂希 2016a. 戦国城下町の景観と「地理」—井口・岐阜城下町を事例として—. 仁木宏編『日本古代・中世都市論』吉川弘文館, 217-248.
- 山村垂希 2016b. 犬山城下町の空間構造とその形成過程. 地域と環境 14, 1-23.